春日井市遺跡解説パンフレット その6

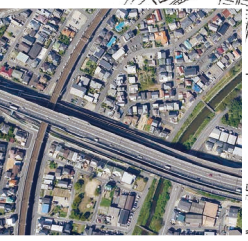
南東山古墳

－ 古墳から伽藍へ、古墳時代から律令時代への胎動 －

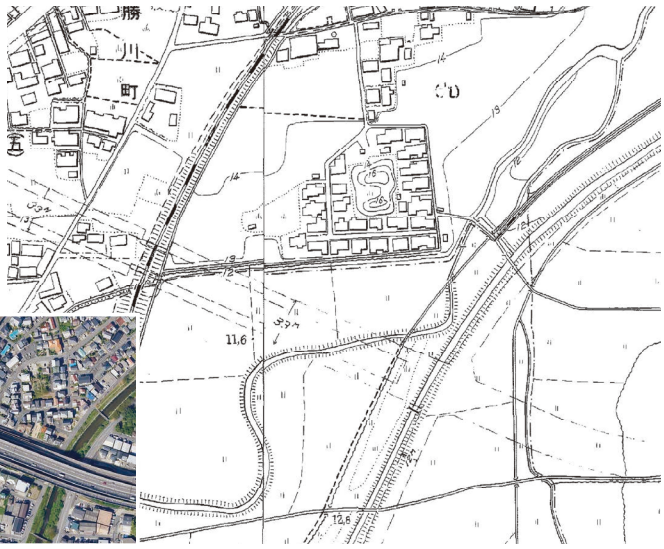
南東山古墳と勝川遺跡

～古墳から伽藍へ、古墳時代から律令時代への胎動～

味美・勝川古墳群現況（2000年撮影）



南東山古墳現況（2019年撮影）



1964年都市計画基本図（1/5,000）

南東山古墳墳丘測量図

南東山古墳発掘調査

南東山古墳の発掘調査　南東山古墳は春日井市勝川町9-9-2他に所在し、かつては墳頂に洲原神社があり、江戸時代の村絵図に「洲原森」として描かれている。洲原神社は1909年天神社に合祀され、その後、墳丘は戦時下の防空壕、周囲の宅地化により漸次改変を受け、1970年の土取り工事により滅失した。

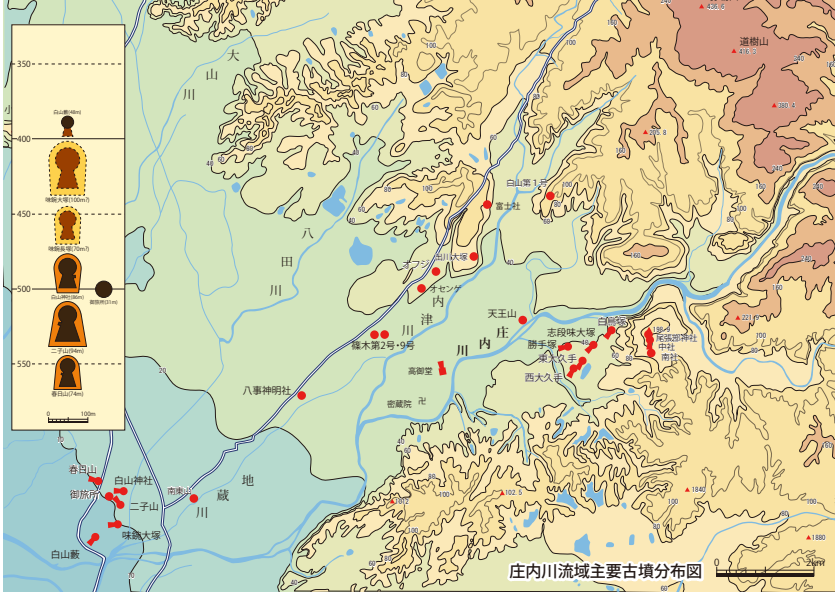
滅失直前に春日井市教育委員会が墳丘測量の他、墳頂等にトレンチを設定し、事前調査を行った。その結果、墳丘は黒褐色有機土・黄褐色粘土の互層により形成し、直径約40m・高さ4m以上の円墳であること、外部施設として、埴輪は原位置を留めていないが墳頂・中段・墳裾への配列が推定され、葺石・周溝を確認した。

埋葬施設は既に破壊され、副葬品等の検出には至らなかったが、遺物は墳丘上から一定量の埴輪・須恵器が出土し、古墳の築造時期は6世紀中葉と推定されている。

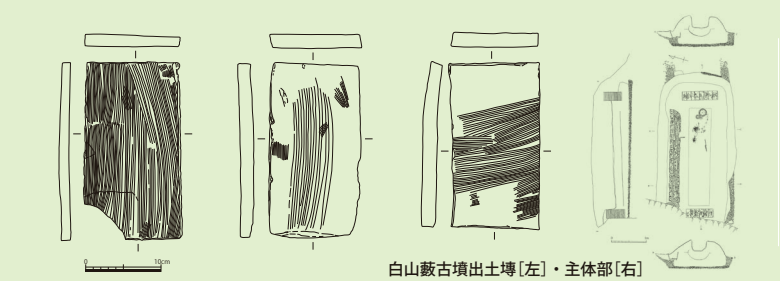
墳形・規模の再検討　勝川町地内に所在した古墳について、1923年刊行の『東春日井郡誌』に「勝川停車場南部に三ヵ所ありしが、〈中略〉唯中央のもの一を存せり、皆前方後円式にして規模広大なり」との記述があり、「唯中央のもの」が南東山古墳に該当する。

測量図によると、南東山古墳の墳丘は西側斜面に等高線による円弧が比較的良く残る一方、東側は直線的な崖面となっており、聞き取りにより「最も大きく削りとった」とされ、既に前方後円墳としての原形（前方部の痕跡）は留めていない。前方部の復元に際しては様々な仮定に依拠するが、削平状況から東側崖面に続く東西方向以外想定し難く、後期古墳では前方部長は後円部径（≒直径約40mの円墳）と同程度かそれ以上に発達するため、前方後円墳としては墳長80～90m前後が必然である。市内最大の二子山古墳（墳長94m）に比肩する南東山古墳の評価は、歴史上極めて重要な意味を持つが、現状では墳形の是非は判断し難い（本書では発掘調査による約40mの円墳とする）。

天保12年勝川村絵図

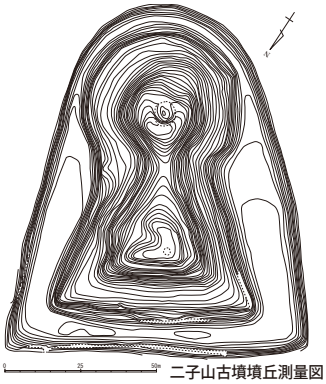


庄内川流域主要古墳分布図

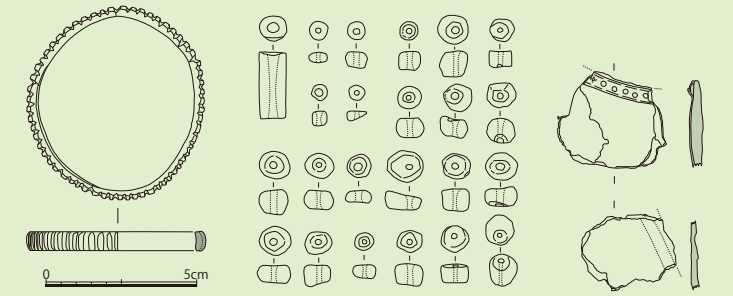


白山藪古墳出土塼[左]・主体部[右]

南東山遺跡発掘調査・出土弥生土器

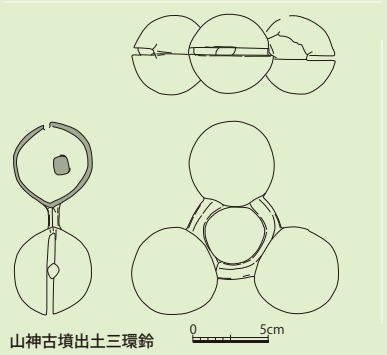


二子山古墳墳丘測量図



笹原古墳出土銀釧[左]・玉類[中]・馬具[右列]

図出典：『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』2009 愛知県



山神古墳出土三環鈴

南東山古墳と勝川遺跡　南東山古墳の発掘調査中、封土（黒褐色有機土）中から弥生土器・石器が出土した他、墳丘崖面に竪穴住居の土層断面が露出し、墳丘直下及び周辺に弥生時代の集落跡の存在が予想された。墳丘の土取り工事の後、弥生時代中期・後期の竪穴住居7棟を確認し、南東山古墳の跡地は南東山遺跡と命名され、後の勝川遺跡の発掘調査・様相解明につながる端緒となった。

その後、区画整理等の大規模土木工事に伴う発掘調査が継続的に実施され、勝川遺跡の推定範囲は南東山遺跡を含む東西600m・南北400mに拡大し、弥生時代の環濠集落から古代へと継続する集落跡・勝川古墳群・勝川廃寺から成る市内屈指の複合遺跡と判明した。

弥生～古墳時代の集落構造は、段丘上の居住域（南東山地区）・墓域（上屋敷地区）、氾濫原の生産域（苗田地区）に区分でき、生産域には水田の他、石器石材の出土や地蔵川の旧河道に臨み木製品の加工場と推定される掘立柱建物を検出し、手工業生産の地域的な拠点と想定されている。また、勝川遺跡は庄内川を利用した水路と近世の下街道の初源的経路の交差点に位置し、水陸交通の要衝を占めている。

南東山古墳を始め勝川古墳群、後の勝川廃寺の造営主体となる豪族が登場する歴史的背景には、地理的利点、勝川遺跡を母体とする集落及び生産基盤の確立があったと推定される。

勝川古墳群と味美古墳群　勝川古墳群は、鳥居松面の段丘崖から庄内川の氾濫原にかけて分布する5～7世紀代の古墳群で、南東山古墳を始め、前方後円墳を含む7基以上が所在したと推定される。市街化により大半が未調査のまま滅失したため、実態は不明点が多いが、伝承された遺物には山神古墳出土とされる鏡・三環鈴等の優品や笹原古墳からは舶載の銀釧を含む多様な副葬品が出土した。

味美古墳群は、勝川古墳群の西へ約1.5㎞に位置し、4世紀後葉の白山藪古墳以降、6世紀中～後葉の春日山古墳に至る約150年間に6基（味鋺大塚・味鋺長塚の2基は地籍図による推定）の前方後円墳による首長墓系譜を辿る愛知県下有数の古墳群である。勝川古墳群と時期的に重複すること、近接した位置関係等から両古墳群の関係が注目されるが、最盛期の二子山古墳と南東山古墳の円筒埴輪は、型式的特徴・製作技法等の共通性が高く、共に下原古窯跡群からの供給と考えられ、両古墳群の関係は親和的であったと推定される。

また、白山藪古墳の主体部に用いた塼、笹原古墳の銀釧等、両古墳群には渡来系氏族の思想的影響・技術的関与、舶載品の流通が想定される点は、被葬者像や古墳群の性格を考える上で示唆的である。なお、塼はハケ調整・窖窯焼成による須恵器系埴輪との関連が推測され、窯業生産の開始時期・生産体制をめぐる重要資料である。

南東山古墳出土埴輪の技術系譜

～南東山古墳は二子山古墳の後継か ?? ～

尾張氏が継体大王擁立に関与し、婚姻を通じて勢力を拡大した結果、6世紀代に地域最大の断夫山古墳（墳長150m）が築造され、最盛期を迎える。二子山古墳はそれに次ぐ墳長94mを誇り、前方後円墳の規格は継体陵に比定される今城塚古墳（高槻市・墳長190m）と共通し、約8割が断夫山古墳、約5割が二子山古墳に相当し、大王墓を頂点とした階層秩序の中に位置付けられる。また、今城塚古墳の外堤上の埴輪群像は、規模を縮小して二子山古墳にも認められ、墳丘規格･埴輪祭祀を通じてヤマト王権との関係がうかがえる。

南東山古墳の埴輪は、墳丘上の中段から墳裾にかけて、破片となって散在した状態で出土した。配列当時の原位置は留めていないものの上位から転落した可能性からは、墳頂・中段平坦面・墳裾の最大で3重の埴輪列が巡るものと推測される。

種類は円筒埴輪が大部分を占め、朝顔形埴輪がごく少量、形象埴輪は3点のみであるが、人物埴輪が確認された。円筒埴輪・朝顔形埴輪の製作技法・型式上の特徴や形象埴輪の写実的な意匠表現は二子山古墳に酷似し、両古墳の系譜的あるいは連携関係を示唆する。

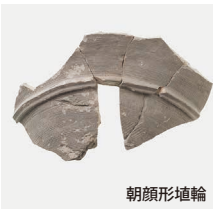
味美古墳群における埴輪の構成・変遷を辿ると、白山神社古墳は2突帯3段の円筒埴輪に大小の規格があり、朝顔形埴輪は一体成形のみ、形象埴輪は人物（冠ないし帯）・盾・家・不明埴輪を墳丘上に配列する。御旅所古墳は、円筒埴輪は倒立技法による3突帯4段のみで配列し、朝顔形埴輪は一体成形の可能性があり、形象埴輪は蓋・不明埴輪を墳丘上に配列する。二子山古墳は、円筒埴輪に2突帯3段・3突帯4段の大小、朝顔形埴輪は一体成形と分割成形があり、多様な型式・製作技法が混在する。形象埴輪は、外堤上に埴輪配列区画を設け、人物（正装男子・巫女・力士・盾持ち人・武人?）・動物（飾馬・裸馬・水鳥）・器財（蓋・盾・石見型）･家（入母屋造）･不明埴輪等、総数60点以上が確認されている。分割成形の導入・多様な型式の存在は、埴輪の短期的な大量需要に対する量産化･生産体制の拡充を背景とするものと考えられる。

不明埴輪とした埴輪は、表裏ハケ調整で長大な板状を呈し、端部は丸みを帯び小円孔の有無による小差がみられる。白山神社古墳では周溝内から数十点がまとまって出土し、墳丘への樹立・配置が想定される。埴輪的な要素を認める一方、具体的な使用法には不明点が多く、不明埴輪の分類も暫定的なものであるが、現時点では生産窯の下原古窯跡群の他、味美古墳群の局地的な分布状況を示す特異な器物である。南東山古墳に確認された点は二子山古墳との系譜的なつながりを傍証する上で極めて重要である。

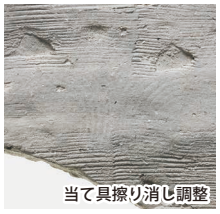
白山神社古墳不明埴輪出土状況［左］・白山神社古墳出土不明埴輪［中］・下原古窯出土不明埴輪［右］

南東山古墳の円筒埴輪は尾張型埴輪に分類される特徴を有し、全て3突帯4段の大型・器高70㎝前後と推定される。製作技法は、底部から口縁部まで順次積み上げる通常成形と成形途中で上下を反転する倒立技法が併存し、底部の確認点数では倒立技法によるものが主体的である。焼成は、還元炎焼成による灰色硬質な須恵器質のものが大部分を占める。調整は、縦ハケ後回転横ハケを基本とし、通常成形によるものは底部の回転ヘラケズリを行う。倒立技法によるものは外面にタタキ調整の圧痕を残すものがある一方、内面の同心円当て具痕は丁寧に擦り消しており、この所作は猿投窯系須恵器の壺甕類と共通し、須恵器工人が埴輪生産に関与したことを具体的に示す事例である。また、尾張地域では埴輪生産が盛行する5 ～ 6世紀代を通じて、須恵器のハケ調整は低調であるが、甕の口縁部に回転横ハケを行う事例があり、須恵器の製作手順に埴輪的な要素が垣間見られる。

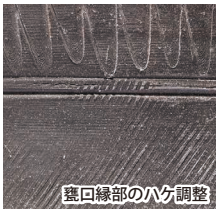
南東山古墳出土埴輪



朝顔形埴輪



当て具擦り消し調整



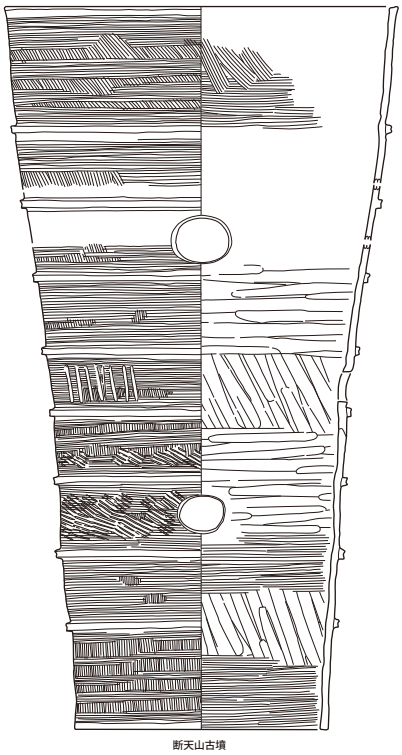
甕口縁部のハケ調整

朝顔形埴輪は二子山古墳同様、基底部から口縁部までを一体成形する通常のものと壺と円筒部分を分けて成形し、焼成後に組み合わせる分割成形が併存する。

二子山古墳 分割成形朝顔形埴輪［上］・人物埴輪［左下］

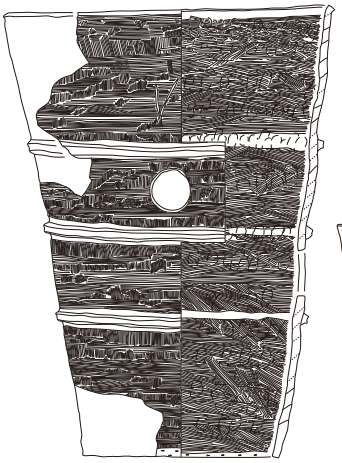
南東山古墳 人物埴輪［上］･不明埴輪［下］

人物埴輪は、袖口付近の腕の小片であるが、縫い目を刺突により写実的に表現する点は、二子山古墳と共通する特徴である。人物埴輪としては、瀬戸市本地大塚古墳と並び、尾張地域最後出の資料である。

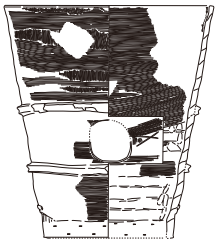


断天山古墳

尾張型埴輪の階層構成（1/12）

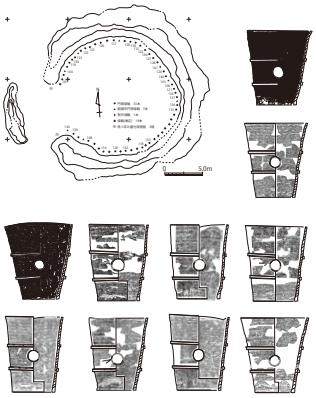


二子山古墳



二子山古墳

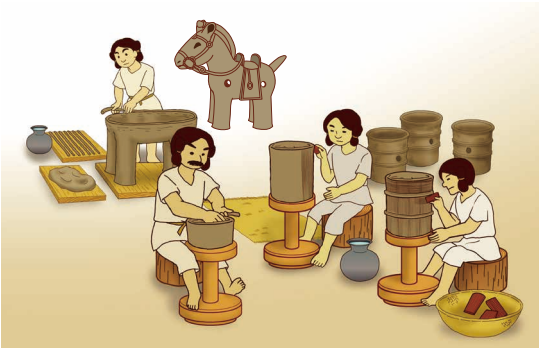
名古屋三の丸遺跡3号墳



円筒埴輪の同工品（可児市宮之脇11号墳）

二子山古墳出土埴輪

二子山古墳形象埴輪出土状況



須恵器製作技法を応用した埴輪生産（イメージ）

御旅所古墳埴輪列

白山神社古墳埴輪列

尾張型埴輪の製作技法と階層性

窖窯焼成・轆轤成形を始めとする須恵器の製作技法を応用した埴輪を須恵器系埴輪として区別し、この内、尾張地域を中心に分布し、形態上の規格性を有し、倒立技法・味美技法等の独自性の強い製作技法を持つ一群の埴輪を尾張型円筒埴輪（尾張型埴輪）とよぶ。

形態は2突帯3段を基本形とするが、前方後円墳・大型円墳には3突帯4段以上の大型が存在し、尾張型埴輪の最盛期には地域最大の断夫山古墳の8突帯9段・器高116cmを頂点として、古墳の墳形・規模に対応した埴輪の階層的な規格構成が成立する。埴輪の規格は2突帯3段の基本形では、器高25cm・35cm・45cm前後にまとまりがあり、3突帯以上の大型は器高約70cm以上で、高さに比例して突帯の条数が追加される。

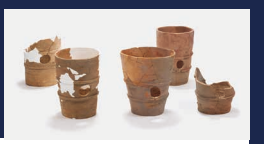
なお、轆轤の回転力を利用した結果、規格性の強い埴輪が量産化され、尾張型埴輪のもつ規格性は轆轤成形の副産物ともいえ、特に同一工人による製品（同工品）は法量・調整等の細部にわたって画一的なつくりとなっている。

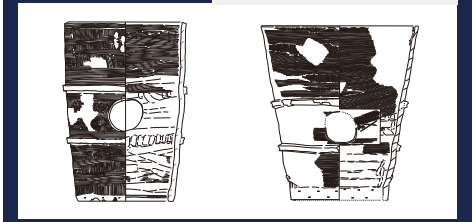
尾張型埴輪の同工品（白山神社古墳）

尾張型埴輪の型式変化と埴輪列

尾張型埴輪の型式変化について、2突帯3段の基本形は6世紀前葉を境に、口径と底径の差が小さい筒形から口径が大きく上回る逆台形へと形態が変化する。同時に、2条の突帯により区分される基底部・胴部・口縁部の高さが、口縁部と基底部の高さが等しいものから、口縁部が高く、基底部が低いものへと変化する。

埴輪の配列は、溝を掘削し、基底部の一部を埋設して行う。埴輪の型式変化は、地上に見える口縁部を大きく誇張する一方、地中に埋まる部分を縮小する形となるため、配列は地上に据え置くのみまたは、埋設溝を浅く簡略化した可能性を示唆し、埴輪祭祀の合理化・形骸化の一端を示すものと考えられる。





左:白山神社古墳出土円筒埴輪（5世紀末葉～6世紀初頭）・右:二子山古墳出土円筒埴輪（6世紀前葉）

埴輪生産の須恵器化 ～褐色から灰色へ～

円筒埴輪は弥生土器（器台）に祖形があり、野焼き焼成による赤褐色～褐色が埴輪本来の色調である。一方、窖窯焼成を行う尾張型埴輪には酸化炎による褐色と灰色・硬質に焼き締まった須恵器的な焼質のものが混在する。

2突帯3段の円筒埴輪は、白山神社古墳ではほぼ全てが褐色、二子山古墳では7～8割が褐色、大垣戸狐塚古墳ではほぼ全てが還元炎焼成による黒褐色を呈し、時期が降るごとに埴輪的な色調から須恵器的な色調への変化が認められる。埴輪生産の独自性・本質的な理解が薄れ、須恵器生産との融合過程を示すものと推測でき、大垣戸狐塚古墳の段階には埴輪の需要はピークを過ぎ、生産体制は縮小し、須恵器の一器種として生産された可能性を示唆する。

3突帯4段の円筒埴輪は、御旅所古墳・二子山古墳・南東山古墳では還元炎による灰～黒灰色が主体的で、当初から須恵器的な色調を呈し、倒立技法による個体はほぼ全て還元炎焼成によるため、製作工人の違いを反映した可能性もある。

大垣戸狐塚古墳出土2突帯3段円筒埴輪

鳥形の造形意匠と葬送祭祀

～南東山古墳の築造時期と主体部をめぐる諸問題～

南東山古墳では、墳丘上の表面・墳丘下の基盤面・土取り後の排土から鳥鈕蓋の他、蓋坏・高坏・器台・甕・短頸壺・広口壺・甕等、多様な須恵器が出土しているが、原位置を留めず、破損したものが多いため、葬送祭祀の具体像は不明である。

蓋坏(坏身)の特徴は、墳丘下から出土した一群が口径約13㎝、受部の立ち上がりは急角度で高く、墳丘上から出土した一群が口径約12.5㎝、受部の立ち上がりがやや緩く低く、口径・器高の縮小化傾向は新旧の型式差を反映したものと考えられる。猿投窯の須恵器編年に対照すると前者が東山61号窯式期、後者が蝮ヶ池窯式期に比定され、南東山古墳は6世紀中葉の築造、6世紀後葉までの祭祀の継続を示唆する。主体部は調査以前に破壊され不明であるが、祭祀が追葬を契機とした場合、横穴式石室の可能性は整合的である。

南東山古墳からは鳥鈕蓋3点が出土しており、鳥の造形は、粘土塊を鳥形に成形し、目・羽を刺突・線刻により表現するが、頸の長さや尾の立ち上がりには個体差があり、鳥の種類等を表現したものと考えられる。

一方、鈕のつくりでは、通常の蓋として成形した後、鈕の上部に鳥を置き、下部を包むように固定するものと鈕の基部から鳥形までを一連のつくりとするものの2種類がある。前者は犬山市白山神社古墳出土の有蓋高坏に類例があり、後者は有蓋脚付壺の表現に一般的にみられることから、鈕のつくりの差は器種の違いとも考えられる。

なお、鳥鈕蓋は土取り後の排土中から採集されたもので、本来は3点以上存在した可能性が高い。1個体複数の鳥形は子持ち脚付壺に伴うことが多く、4つの子持ち壺・親壺に鳥形を配した宮之脇11号墳出土事例が一つの参考となる。

鳥鈕蓋付須恵器とは、古墳での葬送祭祀に用いた装飾須恵器の一種で、有蓋高坏・有蓋脚付壺の蓋の摘みに鳥形の造形を施したものである。6世紀前葉から7世紀中葉にかけて、愛知県を中心に分布し、東海地方に23遺跡・36点の確認事例があり、春日井市内では南東山古墳3点・勝川古墳群1点、計4点が出土している。

葬送関連の「鳥」にまつわる思想については、「死者の魂を冥界に運ぶ」、あるいはヤマトタケル白鳥伝説に代表されるように「(人は死ぬと)鳥と化して飛翔する」等、様々な想定がある。

南東山古墳出土鳥鈕蓋・蓋坏

鳥鈕蓋付須恵器の優品 ～供給窯と技術系譜・造形意匠をめぐる諸問題～

宮之脇11号墳(岐阜県可児市)は、6世紀中葉に築造された墳長20.7mの造り出し付円墳で、周溝内から円筒埴輪・須恵器等が出土し、円筒埴輪は胎土分析により下原古窯跡群からの供給が判明した。須恵器は、蓋坏・無蓋高坏・器台・甕・広口壺等の他、鳥鈕蓋を伴う子持ち脚付壺2点がある。

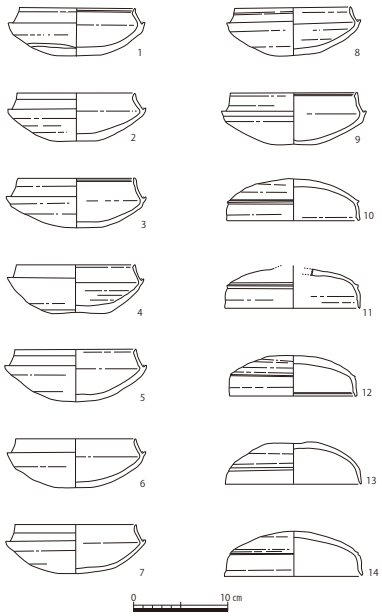
鳥形の造形は、親壺の肩部に4つの子壺を配し、子壺の蓋には羽を広げ飛翔する鳥、親壺の蓋は羽を閉じ静止した鳥を3段に重ねている。写実的な造形意匠と中空の体部にソケット状に成形した頭部を差し込む成形技法は、二子山古墳・下原古窯跡群等から出土した水鳥形埴輪と共通する特徴である。

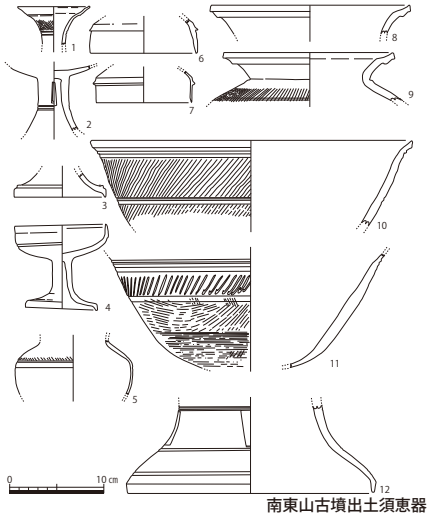
美濃地域では6世紀代の須恵器窯が未確認であること、埴輪と共通するつくりからは、(須恵器の胎土分析は行われていないが)円筒埴輪同様、下原古窯跡群からの供給と推定される。

鳥形頭部のソケット状の成形　左:二子山古墳・中:下原古窯跡群・右:宮之脇11号墳 図出典:『川合遺跡群』1994可児市教育委員会

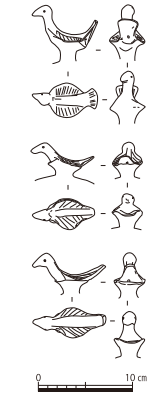
可児市宮之脇11号墳出土鳥鈕蓋付須恵器

図出典:『川合遺跡群』1994 可児市教育委員会





南東山古墳出土須恵器



勝川古墳群出土鳥鈕蓋付須恵器

写真出典：『春日井市史資料編』1963 春日井市

二子山古墳出土須恵器

高蔵寺第5号墳出土須恵器

明知第1号墳出土須恵器

神領第4号墳出土須恵器

神屋第1号墳出土須恵器

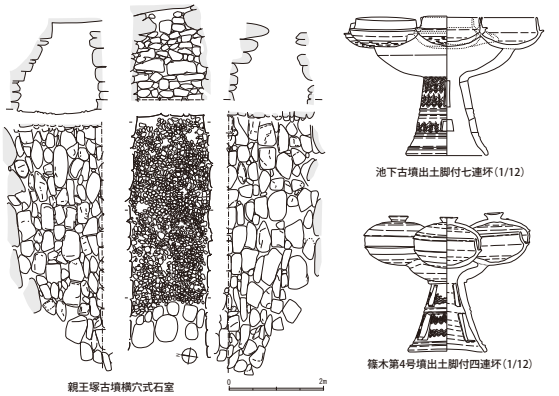
神領第1号墳出土須恵器

南東山古墳の主体部 ～横穴式石室の可能性～

尾張地域における前方後円墳への横穴系埋葬施設の導入は、5世紀末葉～6世紀初頭の池下古墳(名古屋市)において排水施設を検出し、初源期の横穴式石室の可能性が指摘されている他、6世紀前葉の白鳥古墳(名古屋市)は江戸時代に露出した石室と須恵器・馬具等の副葬品の絵図が残されている。また、6世紀中葉に降ると小幡茶臼山古墳(名古屋市)において左片袖式の横穴式石室が確認されているが、地域最大の断夫山古墳(名古屋市)の主体部が不明である等、導入段階の型式・系譜等、具体的様相には不明点が多い。

春日井市内では盗掘等に際して、二子山古墳(6世紀前葉)は副葬品・石棺・石材が出土、春日山古墳(6世紀中～後葉)は巨石が掘り出されたとの記録から横穴式石室の可能性が推測されるのみである。一方、篠木第4号墳は直径約20mの円墳とされ、破壊された際に石室から須恵器(脚付四連坏・広口壺)・鉄刀が出土し、5世紀末葉～6世紀初頭の築造と推定される。いずれも横穴式石室としては記録上の不確定要素を残すが、池下古墳と並ぶ地域最古級の可能性があり、また、横穴式石室の導入が前方後円墳から円墳へと段階的に波及するのではなく、首長墓から小地域の円墳まで、同時に進行した可能性を示唆する点で重要な事例である。

春日井市内の現存例では、6世紀中葉の親王塚古墳(径約15m・円墳)が最古で、玄室は小形の川原石積みによる長方形プランを有し、長さ4m・最大幅1.6mを計測する。墳丘規模の比較からも南東山古墳に横穴式石室が採用されていた可能性は高く、土取り工事により石材等が確認されていないことから、防空壕の陥没痕に重複する東西方向・西向き開口、または、既存の墳丘部分より東、削平を受けた地点に想定される。



親王塚古墳横穴式石室

池下古墳出土脚付七連坏(1/12)

篠木第4号墳出土脚付四連坏(1/12)

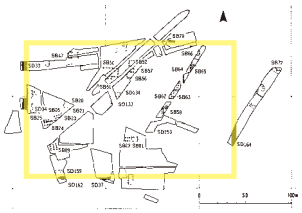
親王塚古墳墳丘測量図

親王塚古墳出土須恵器

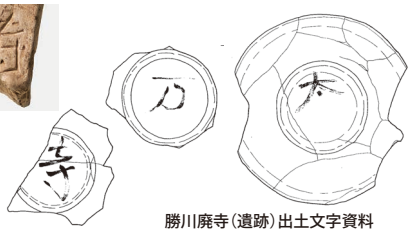
篠木第4号墳出土脚付四連坏

古墳から伽藍へ、南東山古墳と勝川廃寺

～ランドマークとしての威容～



勝川廃寺区画溝



勝川廃寺（遺跡）出土文字資料

瓦の堆積

勝川廃寺出土瓦　愛知県埋蔵文化財調査センター所蔵

勝川廃寺　勝川廃寺は7世紀後半に造営を開始し、その後、9世紀後半頃まで存続したと推定されている。寺域を示す区画溝は、東西227m・南北148mに及び、寺院の存在を示す「寺」の刻書瓦や「寺」・「宅北」の墨書土器の他、倒壊した瓦葺き建物を示唆する東西10m余りに及ぶ瓦の堆積、複数の掘立柱建物を検出した。

一方、講堂・金堂・塔等の礎石・基壇は特定に至らず、伽藍配置は不明である。出土した瓦は川原寺式・藤原宮式に大別でき、いずれも庄内川を遡る高蔵寺瓦窯から供給されたものである。

古墳時代から律令制へ　地方の有力豪族は、古墳時代には「国造」として「国」を支配し、権力の象徴として古墳を築造した。飛鳥時代以降、律令制の下では、豪族の私有地は廃されたが(=公地公民)、「郡司」として行政・徴税・班田・祭祀権等を有し、中央集権体制の地方統治を担い、古墳に代わる権力の象徴・祖先祭祀の場として氏寺を建立した。

律令制の確立期には豪族居館に郡衙が置かれる例があり、弥勒寺官衙遺跡群(岐阜県関市)は壬申の乱で活躍したムゲツ氏の拠点で、池尻大塚古墳(方墳)の他、武義郡衙の郡庁・正倉・館・厨家等の遺構群、氏寺として造営した弥勒寺跡、水にまつわる祭祀跡が確認されている。

勝川廃寺と春日部郡衙　「勝川」は陸水路の要衝を占め、段丘崖に立地する南東山古墳・勝川廃寺の伽藍(瓦葺きの建物)は、時代を象徴するランドマークとして、威容を誇ったと推測される。また、勝川遺跡は弥生時代の環濠集落以来、古墳時代を経て古代へと継続的に発展した市内屈指の集落跡であり、木製品・石器加工等、地域の拠点的性格を併せ持っている。

勝川廃寺から出土した瓦は型式ごとに分布域が分かれ、建物の段階的な造営過程を示すと共に、広大な寺域には寺院とは別の複合的な性格・機能が想定される。「勝川」の歴史的背景・地理的特性や勝川廃寺の造営主体の祖と想定される南東山古墳を始めとする勝川古墳群の存在、律令的祭祀(=祓)等の諸点から、勝川廃寺の一画は、豪族居館または「春日部郡衙」の有力候補地に挙げられる。

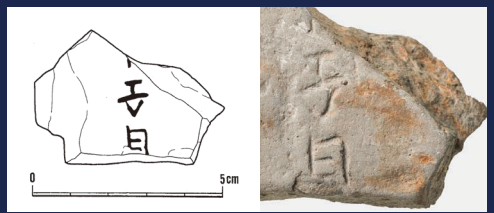
文字が刻まれた埴輪　～春日井の文字使用の起源をめぐって～

勝川遺跡から文字を刻んだ1片の円筒埴輪が出土した。

報告書によると、埴輪の内面に「不明」→「子」ないし「干」→「日」ないし「目」の3文字が確認でき、粘土が乾燥する前(=焼成前)に刻んだものとされている。

一方、文字の判読が困難な点、古墳ではなく近世の井戸内から出土した点、文字は焼成後に刻んだもの(=古墳時代より後の時代の可能性)との疑問や異論もある。

文字を刻んだ埴輪は5～6世紀代に盛行した須恵器系埴輪であり、「記紀」が記す5世紀代の漢字の渡来時期にも近く、市内最古の文字資料の是非をめぐる歴史的評価は極めて重要な意味を持つ。



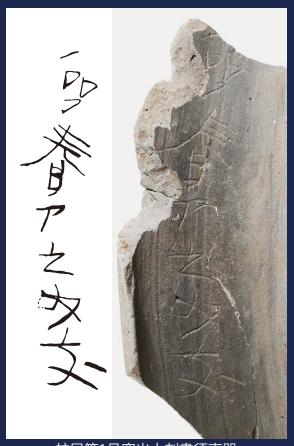
図出典:『勝川遺跡』1988 愛知県埋蔵文化財センター　愛知県埋蔵文化財調査センター所蔵

春日井の地名起源　～「春部」刻書須恵器～

8世紀以降、市内では窯業遺跡・祭祀遺構を中心として、刻書・墨書による文字資料が増加する。

8世紀前葉の神屋第1号窯から「■春ア(=部の略字)之奴支」と刻書した甕の口縁部片が出土した他、同時期の高蔵寺第2・3号窯では、「■春部岡本」・「岡本里■部」の刻書が確認されている。

平安時代の『和名抄』は尾張北部一帯に「加須我倍」郡が置かれたことを記し、江戸時代の初め頃に「春日部」が「春日井」へ転訛したとされる。須恵器に刻書された「春部」は春日井の地名起源を最も古く遡る文字資料である。



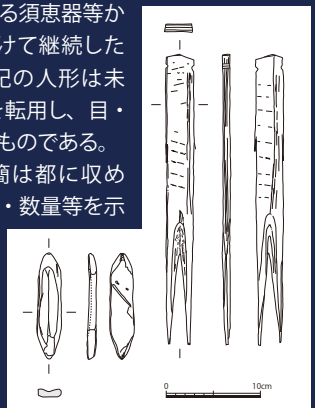
神屋第1号窯出土刻書須恵器

律令的祭祀と官衙　～春日部郡衙の傍証～

勝川廃寺の眼下を流れる地蔵川の旧河道から「万」・「太」・「徳」等の吉祥句を墨書した須恵器・灰釉陶器の他、祓(ハラエ)に用いた祭祀具の木製人形(ヒトガタ)・舟形が出土した。祓とは、人間の形代である人形に穢れを移して川に流すことによって除去し、舟形は人形を他界へ送る乗り物とされている。

祭祀は、共伴する須恵器等から8～9世紀にかけて継続したと考えられ、8世紀の人形は未使用の荷札木簡を転用し、目・鼻・口を線刻したものである。

なお、荷札木簡は都に収める税の産地・品目・数量等を示す札であり、周辺に徴税・貢納を行う官衙「春日部郡衙」の存在を示す有力な傍証となる。



荷札木簡転用人形　図出典:『勝川遺跡Ⅳ』1992 愛知県埋蔵文化財センター

春日井市遺跡解説パンフレットその6　南東山古墳 －古墳から伽藍へ、古墳時代から律令時代への胎動－

編集:春日井市教育委員会　発行:令和2（2020）年3月31日　印刷:木野瀬印刷株式会社

このパンフレットは、文化庁「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」により作成しています。